

古地図に見える帯広・十勝

“Obihiro” and “Tokachi” on old maps

秋山 秀敏

Hidetoshi AKIYAMA

はじめに

地図にはいろいろな情報が刻まれている。川がどんな流れをしているか、集落の場所、山岳、湖、土地の利用形態などさまざまな情報でいっぱいである。そこで、この小文では、古地図上に帯広・十勝がどのように現れてきたかを触れ、その歴史を検証していこうとするものである。また、十勝の地図の歩みを記すことにもある。はじめに地図作製の歴史を概観してから個別地図に入っていくことにしたい。

日本の地図で現存する最も古いものは、天平勝宝3年(751)年に作られた絵図(地積図)で「墾田図・開田図」24点とされている(織田1974)。平安時代になると筆で描いた「行基図」が作られるようになるが、年代が記された現存する「行基図」で最も古のものとされるものは嘉元3年(1305)に写された京都仁和寺所蔵図とされている(三好、小野田2004)。

北海道を島として描いた最初の地図は、朝鮮の申叔舟が文明3年(1471)に書いた『海東諸国紀』に出てくる「海東諸国総図」とされている(秋月1999)。しかし、この地図に描かれている北海道は想像上の島との研究報告もなされている。

また、元和7年(1621)にイエズス会宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリスはエゾ地図を作成、寛永20年(1643)にはオランダ東インド会社のマールテン・ヘルリッツ・フリースが『日本旅行記』を著わし、そこには十勝の地名を記している。

一方、日本国内で作成された地図に最も早く北海道が描かれたのは、江戸幕府の命により作成された慶長国絵図と推定されている。その根拠としては、松前家の事績を記した現存する最も古の記録の『新羅之記録』の慶長4年(1599)の条に松前藩主が徳川家康に謁見して「被御覧狄之嶋之絵図」との記載があるもので、この記録が絵図作成を推定させる理由となっている(高倉、柴田1942)。しかし、この絵図は残っていないのではっきりしたことはわかっていない。他方、慶長国絵図は、東日本各藩に作成の命令が下されなかったという研究もあり、近年はそれが支配的となっている。

江戸幕府による国絵図作成は、慶長年間のほか、正保、元禄、天保の合計4回行われ、各藩から提出を受けた絵図をもとに幕府によって総図(天保を除く)が作成された。北海道の場合は、前記のとおり慶長国絵図が作成されたかどうかは不明であるが、正保、元禄、天保年間の国絵図は、松前藩により作成され、幕府へ提出されている(高木2003)。

このうち、正保国絵図は、正保元年(1644)に幕府に提出されたが現存しない。幸い、各藩から提出された正保国絵図を基に幕府が作成した正保日本総図によりその概略を知ることができる。

天明期に入ると、ロシアの南下政策に危機を感じた老中田沼意次により蝦夷地開発が計画され、天明5年(1785)から翌年にかけて蝦夷地調査が実施された。この調査に基づき『蝦夷拾遺』が著わされ、また、北海道全体の形が現在の形に近くなるなど、これまでの地図に比べて一歩前進した蝦夷地

図が作成されている。

寛政年間から文化年間にかけてのこの時期は、松前藩や江戸幕府による蝦夷地調査が幾度となく実施され、多くの蝦夷地図が作成された。近藤重蔵は、寛政10年(1798)以来6回にわたる蝦夷地調査を実施し、享和2年(1802)に『蝦夷地図式乾』を作成。特に、寛政12年から享和4年にかけて作成されたといわれる『十勝川流域絵図』は当時の十勝の状況を知る貴重な地図である。

皆川周太夫は寛政12年に十勝を調査し、『十勝川本流図』を作成。蝦夷島奇観の著者として知られる村上島之允(秦穂丸)は十勝にも幾度か足を踏み入れており、文化5年(1808)に『蝦夷島地図』、『東蝦夷地名考』を著わしたほか、江戸幕府の医師で採薬師でもある渋江長伯もその著『東游奇勝』で十勝海岸部の状況を詳しく記している。

日本全国を測量して歩いた伊能忠敬とその門弟は、文政4年(1821)に現在の日本地図の輪郭にほぼ近い『大日本沿海輿地全図』を作りあげた。

松前藩士作成の蝦夷地図としては寛政3年(1791)ころの作といわれる加藤肩吾の『松前侍医加藤寿図之』が知られており、その後が続く松前藩の測量家としては今井八九郎がいる。今井は、多くの蝦夷地図を残しており、天保3年(1832)から同5年にかけての作といわれる『東西蝦夷地大河之図』には、ヲホツナイ川(十勝川)が描かれている。

幕末期に蝦夷通として知られた松浦武四郎は、先住民のアイヌの人たちの案内により河川に沿って内陸へ足を踏み入れ、多くの日誌と蝦夷地図を残した。中でも安政6年(1859)ころの作といわれる『東西蝦夷山川地理取調図』28輯は、河川名、山、コタンなどが詳細に記されており、当時の地理やアイヌ語地名を知る貴重な資料となっている。明治2年(1869)には、千島列島、カラフト島を含めた『北海道国郡全図』が開拓使から刊行されている。作者は開拓判官となった松浦武四郎である。この図には、武四郎の提案により決定した11カ国86郡が記されている。

明治6年(1873)からアメリカ人のジェイムズ・R・ワッソンらの指導で始まった三角測量は同9年まで続けられたが、予算と資材不足により事業半ばで中断した。しかし、海岸部の測量は終了し、同8年に開拓使から『北海道実測図』が刊行されている。内陸の地形測量は北海道庁が設置されてから始まり、明治26年から同29年にかけて『二〇万分の一北海道実測切図』の刊行を見た。

一方、参謀本部測量局は明治19年から同26年にかけて輯製20万分の1図を作成、その後陸地測量部により『北海道仮製五万分の一図』が刊行されていく。

北海道庁は明治19年、移民受け入れのために適切な土地を選ぶ殖民地撰定事業に着手し、同24年に『北海道殖民地撰定報文』を発行し、その付図として各原野の概図を作成している。十勝は43の原野が撰定され、『十勝原野殖民地撰定概図』に明示された。そして、撰定した原野に「殖民地区画」と呼ばれる区画を設け、開拓移民に払い下げることにした。このとき作られたのが各原野の「殖民地区画図」で、道路、耕地、公共用地、防風林地、墓地などの情報が書き込まれ、入植地選定のために利用された。

地図を除き、十勝の地名が文献上で最初に見られるのは、文政10年(1827)に編纂された『松前旧事記』の寛永12年(1635)の条に出てくる「戸賀知(十勝)」とされている。早くからアイヌのコタンがあった広尾は、シャクシャインの戦いが始まった寛文9年(1669)に「トマリ」という名で登場する。また、帯広の初見は『東蝦夷地各場所様子大概書』に出てくる「ヲヘレヘル」と「おへれへる」となっており、時代がすすむにしたがって十勝内陸の様子がしだいに明らかになり、文献上に現れる地名が増えていく。

以下、帯広・十勝が地図上にどのように描かれてきたか、その時代背景などを30点あまりの地図を取り上げて概略を記してみたい。

1. 外国人により作成された地図

元和7年(1621)、イタリア人のイエズス会宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリスが管区長に送った『蝦夷報告』に添えた地図。蝦夷地が本州の北側に本州の2倍ほどもある大きな島として描かれ、北は狭い海峡を隔ててアジア大陸に接し、東は北アメリカ大陸に接する東西に長い島となっている。横に川が走り、島を上下に分けている。西洋人蝦夷地を描いた最初の地図とされている。

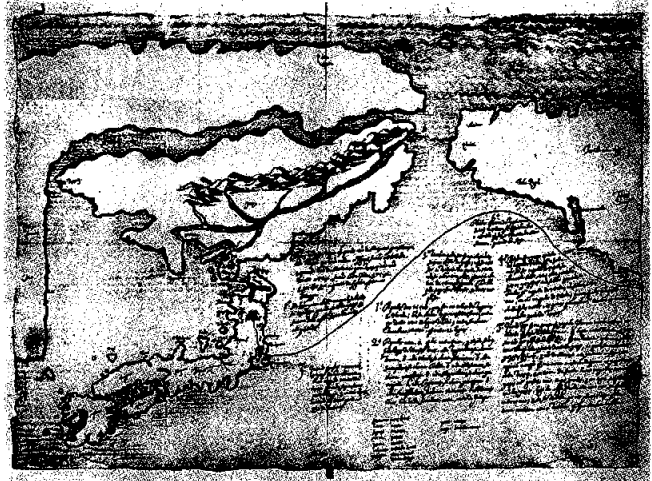


図1 アンジェリスの「蝦夷報告」の地図

寛永20年(1643)には、十勝川河口付近に到着したオランダ東インド会社の商船カストリクム号船長マールテン・ヘルリ

ッツ・フリースが地図を作成している。ここでは、蝦夷地が大陸と陸続きのようにも見えるが、大陸の一部なのか、独立した島なのか地図上では判然としない。なお、フリースが著わした『日本旅行記』には「タカプチー tacaptie (トカチ)」が記されており、十勝の地名が出てくる最も古い文献とされている。

また、元禄5年(1692)ころ、オランダ人のニコラス・ウィツェンが『大タターリア新地図』を作っている。蝦夷地は島ではなく、本州の北部にあって、アジア大陸から東に突き出た半島の先端部として描かれ、ここには十勝の地名として tocaptie (トカプチー) が見える。

2. 正保日本総図

国内で作成され、存在が確認されている地図の中で北海道が記載された最初のもの。正保元年(1644)～慶安2年(1649)ころの成立。原本は存在せず、写図が大阪府立中之島図書館、国立歴史民俗博物館、神戸市立博物館、高知県立図書館などに所蔵されている。

江戸幕府が各藩に命じて領地内の河川、山地、港、沿岸、村落、などの様子を国絵図としてまとめさせて幕府に提出させ、それを基に幕府自らが作成した日本の全体図である。慶長の代では郷帳(御前帳)の作成が主目的で国絵図は附図として作成されたが、正保の代になると国絵図の作成が主目的となり、郷帳は従として作成されている(黒田1977)。

蝦夷地は縦長の楕円形で、中央に大きな湖を持つ。最も原図に近いといわれる大阪府立

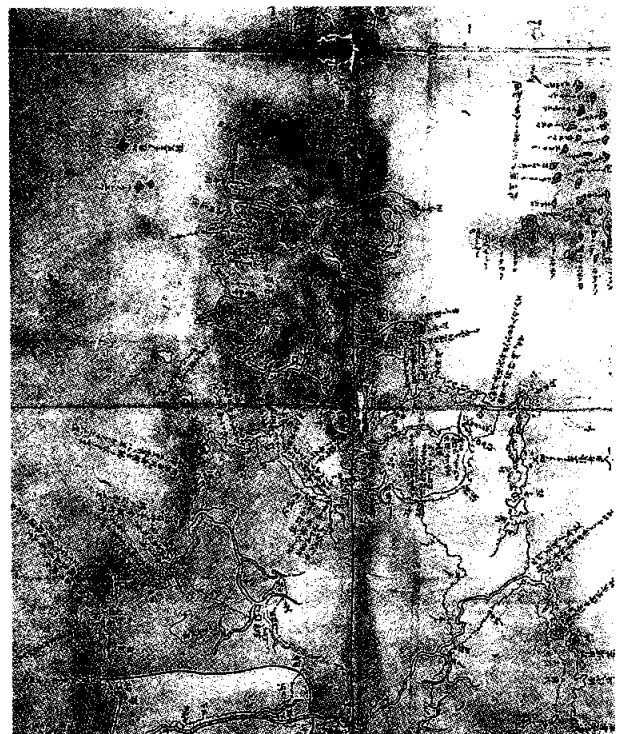


図2 正保日本総図(部分図)

中之島図書館所蔵の『皇國道度図』では蝦夷地本島、千島列島、樺太島に132の地名を記す（高木1998）。そのうち十勝の関係では「トカチ」の1箇所だけである。一般には、国立歴史民俗博物館所蔵の『正保日本総図』が知られており、そこには「トカチエソ」と記されている。記載の場所は十勝川とみられる川の河口部の北なので、現在の浦幌町十勝太付近と思われる。

近世に入りアイヌの人たちの生活は和人との交易に依存するようになり、江戸初期にはアイヌの人たちが松前の地に交易品を持ってきて和人の品物と交換する城下交易が行われていた。その後、知行主が商場（場所）に船で来て取り引きする商場交易へと変わっていく。この商場には拠点となる運上屋（幕府直轄後は会所）が置かれていた。

それでは、その運上屋はどこに置かれていたのでしょうか。古地図や古文書からはトカチブトにあったことが推定される。文政4年（1739）頃のもものとされる『蝦夷商賈聞書』に「トカチ」についての記載があり、そこに「大川ニテ水上広シ」とあることから、その場所は広尾川ではなく十勝川のことであろう。干鮭、ワシノ羽、塩鶴、鹿皮、熊皮などの産物をもて広尾とは考えにくく、当時運上屋があった場所はトカチブトであることはほぼ間違いないと思われる。しかし、それがいつ広尾に移ったのかははっきりしない。寛政3年の『東蝦夷地松前よりアツケシ迄道中日記』に「トカチ場所 ヒロ口運上屋アリ」とあるので、このころには運上屋が広尾に移っていたのであろうか。

なお、十勝において商場知行制が成立したのが寛永期（1624～1644）と推定されているが（菊池1994）、『正保日本総図』における「トカチ」という地名の存在は、十勝において商場知行制が成立していることを裏づけるものであろう。

3. 元禄国絵図

元禄13年（1700）に松前藩が江戸幕府に提出した国絵図。松前藩の『松前年々記』の元禄13年2月4日の条に松前嶋絵図2枚並びに郷帳2冊を献上したと出てくる。原本は東京大学に保管されていたが、大正12年（1923）の関東大震災で焼失した。しかし、幸い火災の前に蘆田伊人によって写図が作られている。写図はほかに市立函館図書館、北海道大学付属図書館、国立公文書館などに所蔵

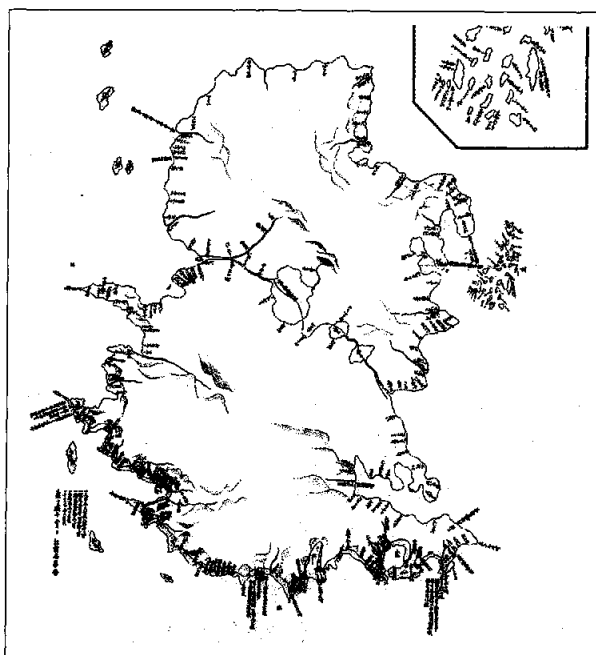


図3 元禄国絵図

されている。図の形は『正保日本総図』と似ており、中央に湖が描かれ、北部にカラフト島、東部に千島列島を配す。地名は蝦夷地、樺太島、千島列島合わせて287が記されている（高木2004）。十勝の関係では「とまり」、「おんべつ」、「とかち」の3箇所が見える。

国絵図と郷帳の関係については、正保の時代と同様に『元禄国絵図』の作成が主目的で『松前嶋郷帳（元禄郷帳）』がその従として作成されており、幕府には国絵図と郷帳が対として提出されている。

この『松前嶋郷帳』も原本は存在せず写本が残されるのみである。そこにも十勝の地名として「とまり」、「おんべつ」、「とかち」が見える。「とまり」は今の広尾、「おんべつ」については、記載の場所が十勝川とみられる川の下に

書かれているので、現在の釧路管内音別町とは考えにくい。十勝管内では「おんべつ」と発音する地名はみられないが、「モンベツ」（広尾町紋別）が「ランベツ」と誤記されて「オンベツ」になったことも考えられる。あるいは、『増補大日本地名辞書第八巻』の「歴舟」の項に「ヘルプネ（歴舟）」を指すという説が紹介されており、ここでの「おんべつ」は大樹町歴舟を指すのかもしれない。「とかち」は今の浦幌町十勝太であろう。既にこのころには十勝においても商場知行制が成立しており、同じ元禄13年に書かれた『松前家臣支配所持名前』には「戸勝」の支配人（ここでは知行主のこと）は蠣崎蔵人とある。

4. 和漢三才図会「蝦夷之図」

正徳3年（1713）から同6年にかけて大坂（大阪）の医師・寺島良安が編纂した我が国最初の百科事典といわれる『和漢三才図会』に掲載された蝦夷地図。木版で印刷された蝦夷地図としては初めてのもの。南を津軽領、北を加良不止島（カラフト島）、東を南部領に面する。蝦夷地は東を上にして南北に細長い島として描かれ、十勝の関係では、南から「トマリ」「トカチ」の地名が見える。「トマリ」は今の広尾であるが、この時点ではまだ「トマリ」と書かれている。『津軽一統志巻十』所収図に似たような形をしており、この出版によって蝦夷地が広く知られようになったのであろう。



図4 和漢三才図会「蝦夷之図」

高木崇世之氏によれば、このほか木版で出版され本で蝦夷地図が描かれているものに明和5年（1768）に義経の島渡り伝説を記した藤英勝の『通俗義経蝦夷軍談』などがあるという（高木2007）。

5. 津軽一統志巻十附図

寛文9年（1669）～同11年に和人とアイヌ民族が戦った「シャクシャインの戦い」に出兵した弘前藩（通称津軽藩）が享保16年（1731）、当時の弘前藩出兵の様子や蝦夷地の状況を記録した『津軽一統志巻十』に収められたエゾ地図。『和漢三才図会』所収図に似て南西から北東に細長く、岬が強調されている。シャクシャインの戦いのとき弘前藩が収集した情報を基に作成されたといわれ、各地の和人の犠牲者の状況が記載されているが、巻十本文とは一致しない。巻十本文には和人の側の船の数と死亡した乗組員の数



図5 津軽一統志巻十附図

載があり、このうち十勝では乗組員17人、鷹師3人が殺されたとある。このことから、既にこのころ知行主の交易船が十勝にきていたことになる。このシャクシャインの戦いの結果、アイヌの人たちにとっては商場知行制の厳格化を強いられることになったといわれている。

附図には十勝の地名として『和漢三才図会』に見られた「トマリ」、「トカチ」に加えて、「大とか

ち」の3箇所が記されている。また、巻十本文の「とまり」の項には「是迄二里計 澗有」と記されているが家屋の記載はない。しかし「とまり（広尾）」の地名が『津軽一統志』が書かれた62年前の寛文9年当時存在していたことを示す資料ともなっている。「とかち」の項には「川有 狄おとなシリテシ持分 家四、五軒」、「大とかち」の項には「川有 狄おとなシリテシ 家十軒」とあり「とかち」、「大とかち」とともに居住者がいたことがわかる。それではなぜ、「とかち」と「大とかち」の二つの地名があるのであろうか。コタン名は、当時和人が交易により知ることができた村の名前を行政区画的な面から用いていたので、純然たるコタン名と地域名の区分があった。たとえば松浦武四郎が歩いた安政5年の当時、村としての「トカチ」は「トカチブト」、「ヲヘソコウシ」、「シチ子イ」、「ウラホロフト」、「アシ子シユム」の五つのコタンからなっており、「大とかち」とは「トカチ」を除いた残りのコタンの総称なのかもしれない。「シリテシ」は当時のアイヌの人たちの指導者なのであろうか。

なお、十勝に商場（トカチ場所）知行制が成立したのは、先に触れたように寛永期（1624～1644）ころと推定されている。それが場所請負制への移行していく時期については、享保12年（1727）成立の『松前西東在郷并蝦夷地所附』に場所請負人の名前が載っていないこと、さらに元文4年（1739）頃の『蝦夷商賈聞書』に松前藩の蠣崎蔵人の手船が商いのため戸梶（トカチ）に来ていることが書かれていることから、両書が書かれた享保期から元文期にかけてと考えられる。この間にトカチ場所が商人に請け負われ、場所経営がなされていったのではなかろうか。

6. 蝦夷国全図

天明5年（1785）に経世家（経済思想家）で寛政の3奇人といわれた林子平が著した『三国通覧図説』の付図。縦52cm、横95cm。木版で天明6年に版元の須原屋市兵衛により出版された。付図は5枚あり、そのうちの1枚が『蝦夷国全図』。林子平は蝦夷地を訪れていないので、長崎遊学中に得た知識や当時の書物を参考にして作成したといわれている。広く普及した地図といわれ、写図も多く、現在でもいろいろな資料に引用されている。三国とは朝鮮、琉球、蝦夷地をさす。「カラフト嶋」は大陸の半島として描かれ、別に「サガリン」を島としている。蝦夷地は南北に細長く、海岸には航路

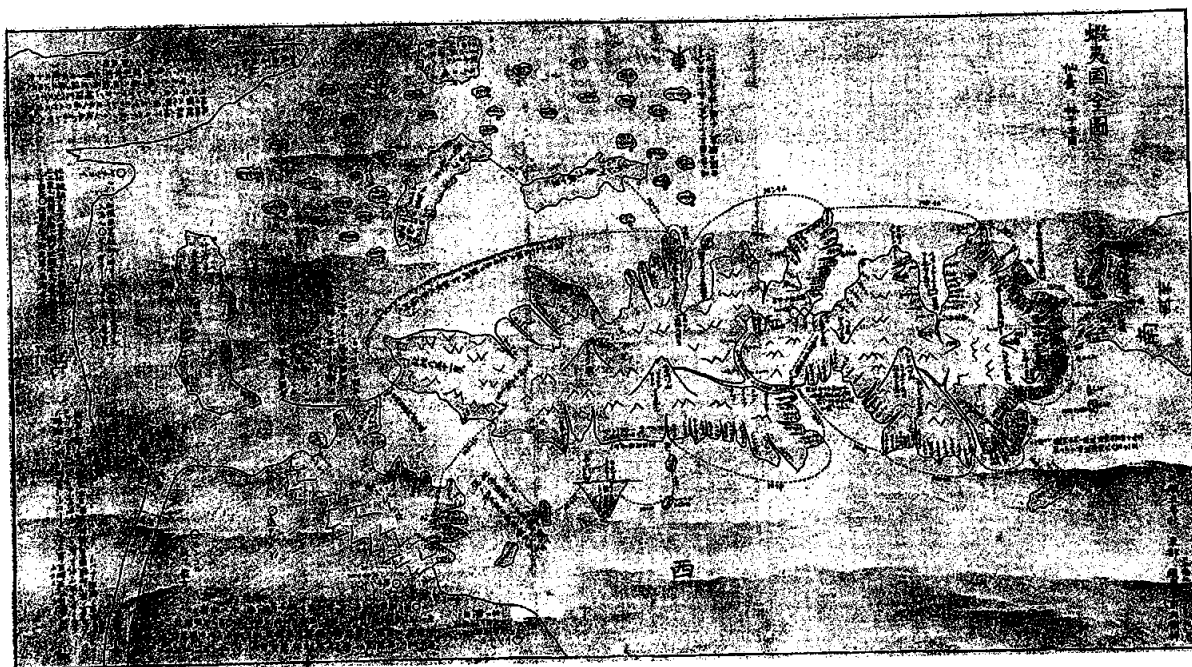


図6 蝦夷国全図

を記す。十勝の関係では、十勝川と推定される川が内陸部に入り込み、その北側に「トガチ」、南側に「オンベツ」が記されている。十勝海岸に航路の記載はなく、海岸に「砂金多」の記載があることから、当時、十勝が砂金の産地として知られていたことを裏付ける資料の一つである。

林子平は当時ロシアの南下など、海外事情に注目、海防の重要性を説き『三国通覧図説』のほか『海国兵談』などを著したが、幕府忌諱に触れ蟄居となり、著作物も発禁となった。

7. 東山道陸奥松前千嶋及方州掌覧之図

寛政元年（1789）頃作成の地図。北海道大学附属図書館所蔵。手書きで縦98cm、横110cm。作者は天明5（1785）～6年に蝦夷地調査に参加した幕府御普請役の青島俊蔵といわれている（秋月1999）。蝦夷本島に比べて千島列島のクナシリ、エトロフ、ウルップ島などが異常に大きく描かれ、地名のほか、山岳、航路、蝦夷地の産物、アイヌ語などを記している。十勝の関係では、海岸沿いに西から「ヒロ」、 「ユウト」、 「ヲホツナイ」、 「トカチ」、 「ヲコツヘ」など5カ所の地名を記すが、航路の記載は見えない。この地図において、これまで「トマリ」と記されていた「広尾」が初めて「ヒロ」と出てくる。地図にヲホツナイが登場するのもこの図からである。

幕府老中・田沼意次の命により天明5年から同6年にかけて行われた蝦夷地調査は、西蝦夷地と東蝦夷地の2班に分かれて実施されている。その目的は、蝦夷地開拓を図るための下調べにあった。調査役には御普請役の山口鉄五郎、庵原弥六、佐藤玄六郎、皆川沖右衛門、青嶋俊蔵の5名が選ばれ、同下役5名も同行した。御普請役のうち皆川沖右衛門は松前に留守隊として待機し、西蝦夷地は庵原弥六、佐藤玄六郎が受け持ち、十勝は東蝦夷地調査隊の青島俊蔵、山口鉄五郎が調査にあたった。当初東蝦夷地調査隊には青嶋の知人である本多利明が足軽として参加の予定であったが、代わって雇の最上徳内が加わった。

青嶋らは天明5年4月29日に松前を出発、船でアツケシに上陸、クナシリなどを回っているがこの年は十勝に足を踏み入れていない。翌天明6年は最上徳内が単身陸路で東蝦夷地海岸を歩きクナシリ、エトロフなどを調査。帰りは青嶋と落ち合い、徒歩で十勝海岸を通り松前に戻っている。このあと青嶋は、クナシリ・メナシの戦いの後の処理で松前藩に助言を与えたこと責任を問われて入牢し、寛政2年に獄死している。

佐藤玄六郎はこのときの調査内容を『蝦夷拾遺』として著わしており、その中に「トカチ 運上屋三戸 海岸里数四十里余」と記されているが、なぜ運上屋が三戸なのか不明である

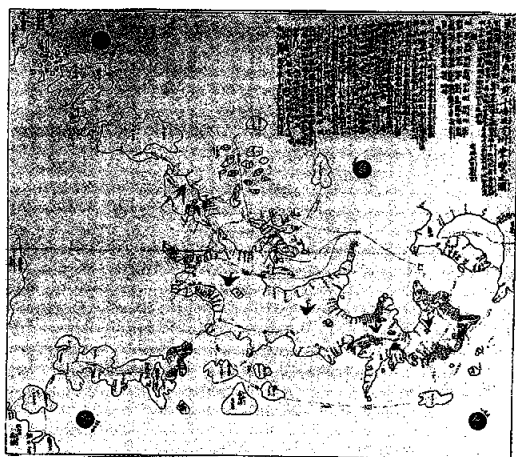


図7 東山道陸奥松前千嶋及方州掌覧之図

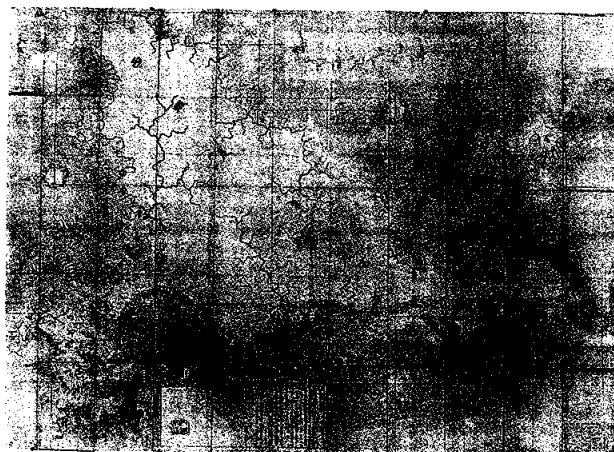


図8 蝦夷古地図

8. 蝦夷古地図

寛政2年(1790)に江戸時代の経世家(経済思想家)本多利明が作成したといわれる蝦夷地図。手書きで縦118cm,横162cm。本多の門人に最上徳内がおり、幕府老中田沼意次の蝦夷地調査のときはメンバーに徳内を推薦したことで知られる。また、本多は徳内の『蝦夷風俗人情之沙汰』にも序文を寄せている。

『蝦夷古地図』は徳内から蝦夷地の情報を入手して作成したといわれており、内容は蝦夷風俗人情之沙汰附図の『蝦夷之図 松前所在』に似ている。十勝の関係では十勝川が大河として描かれ、川筋は現在の大雪山系の方まで奥深く伸びている。十勝川河口は二つに分かれ中島が描かれている。地名は西から「ヒタノヌン」、「ヲシラベツ」、「ベンベマモイ」、「ピロウ」、「ラツコベツ」、「ムツカベツ」、「トヨイベツ」、「ヘロツナイ」、「フイブシマ」、「ノウブイ」、「ユウドウ」、「コクシモトウ」、「チヨブシ」、「オコツナイ」、「トカチ」、「ヲコツベ」など19ヵ所が記されており、時代の進展に伴って地図上に十勝の地名の記載が増えてくことがわかる。天明の調査以降、広尾は「トマリ」から「ヒロ」または「ピロウ」と名前が変わるが、この図においても「ピロウ」と記されている。

この当時の場所請負人は栖原角兵衛とみられるが、寛政11年には東蝦夷地が幕府の仮直轄領となり、トカチ場所における請負制が廃止され、以後、トカチ場所は幕府による直捌制が行われた。文政4年(1821)に松前藩へ復領し、その後家臣の知行地となることなく藩主の直領地として場所経営が行われていく。安政2年(1855)に再度幕府の直轄領(箱館奉行所管轄)、翌年仙台藩警護地となり、同6年仙台藩領となる。仙台藩は広尾に出張陣屋(屯所)を設けて警護にあたり、すぐに明治維新を迎えることになる。

9. 松前侍医加藤寿図之

寛政3年(1791)頃松前藩侍医加藤肩吾が作成した蝦夷地図(高木2003)。縦85cm,横105cm。北海道大学附属図書館所蔵。松前藩作成の地図のためか多くの写本が作られたという。千島列島は形が整ってきているが、カラフト島は横に長く描かれている。蝦夷地は現在の北海道を東西に引き延ばしたような扁平な形をし、石狩川、天塩川、十勝川、釧路川などが描かれ、特に石狩川が網走の方まで伸びているのが目に付く。十勝川は内陸部奥深く網走方面まで達し、その先は赤線が引かれてオホーツク海まで伸びており、当時の通路を表したものと思われる。

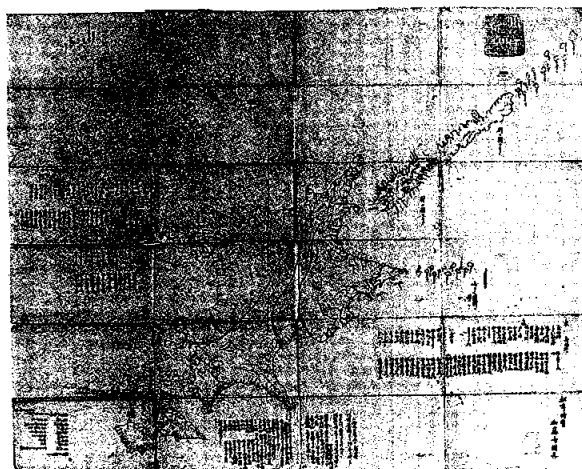


図9 松前侍医加藤寿図之

十勝川の河口が二つに分かれてその中央に中島があり、中島の東に「トカチ」、西に「ヲホツナエ」の地名が見える。十勝川の西側には、「ユウトフ」、「トウフイ」など4つの沼が大きく描かれている。地図の欄外には松前地方の里程や東西蝦夷地各場所支配人(松前藩家臣の知行主)の名前が記されており、「とかち」の支配人は「蠣崎内蔵丞」とある。

作者の加藤肩吾は寛政4年(1792)のロシアのラックスマン使節の根室到来、及び同8~9年のイギリス人のプロートンの虻田、室蘭来航の際に松前藩側の一人として現地に派遣され応

接にあたった人物であり、『魯西亜実記』、『外国人物帆前艦図巻』などの著作がある。

10. 蝦夷地澗（ふなま）絵図

木版図で寛政3年（1791）頃に作成された蝦夷地図。縦92cm、横115cm。輪郭は『松前侍医加藤寿図之』に似て東西に細長い。北海道大学附属図書館所蔵のものは下部に林子平の『三国通覧図説』の「蝦夷国図説」の抜粋が記されている。高木崇世氏によれば、加藤肩吾が作成した蝦夷図に基づいて刊行されたものという（高木2007）。一般に流布していた実用地図といわれ、十勝関係では西から「ヒロフ」、「トカチ」の2カ所の地名が見える。

澗（ふなま）とは谷川または谷を意味するが、ここでは船着き場または入り江、港などを指す。

絵図では港の良好度を上澗、中澗、下澗の3段階に区分しており、「トカチ」に対しての記載はみられないが、「ヒロフ」については一番下位の下澗にランク付けしている。当時の人たちが港をどのように評価していたのかみてとれておもしろい。また、「ヒロフ」には航路を示す線が描かれていて、交易船の往来があることがみてとれる。「トカチ」に対して「澗」の記載がないのは、港としてはあまり機能していなかったのかもしれない。ちなみに「クスリ」（釧路）は「上澗」となっている。

11. 蝦夷奇勝図巻

寛政11年（1799）に幕府の医師渋江長伯の蝦夷地採葉調査に随行した絵師谷元旦が、東蝦夷地を描いた風景図巻。26枚からなる。谷元旦は『隅田川鴻台真景図巻』などの作品で有名な画家谷文晁の弟にあたる人物。元旦は寛政11年4月28日に松前を出発し、6月13日に日高からピロウ（広尾）へ入り、十勝で6泊して同月19日にヲコツナイ（大津）を出てシヤクベツ（尺別）へ向かっている。帰りは厚岸で引き返し、7月12日に再びヲコツナイに入り、同月16日にピロウから日高へ出ている。十勝では往路、復路合わせて10泊していることになる。図巻26枚のうち十勝関係では、『トカチ会所地名ピロウ之景』、『トウフイ番屋之図』、『ヲホツナイ番屋之図』の3枚がある。『トカチ会所地名ピロウ之景』には海に張り出した岬に会所か旅館のような建物があり、その前に6人の人物が描かれ、周囲に16軒の建物が並ぶ。会所の後ろは山がせまり、上に向かって道が作られ、その中腹にも建物（刀勝の社）が建つ。『トウフイ番屋之図』はヘルフネ（歴舟）からクスリ（釧路）までが海上から見た鳥瞰図のように描かれ、前面にアイヌの人たちの家3軒とその奥に番屋らしき建物が建つ。遠くにはトカチ岳、サツナイ岳、ラツコ岳がそびえる。『ヲホツナイ番屋之図』には、中央にト

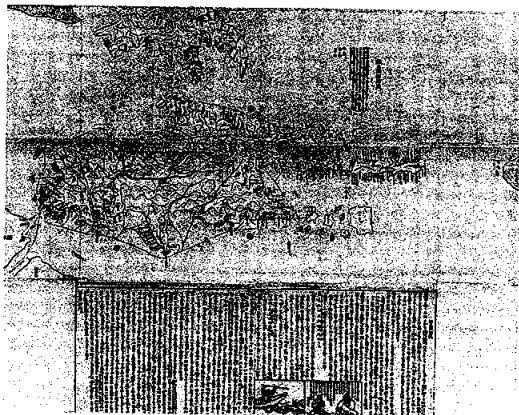


図10 蝦夷地澗絵図



図11 蝦夷奇勝図巻 トカチ会所地名ピロウ之景

カチ川が大きく描かれ、河口近くに5人のアイヌの人たちが乗った丸木舟が浮かぶ。番屋の敷地は柵で囲まれ、その中に番屋とみられる建物が12棟並ぶ。海岸沿いにアイヌの人たちの住居とみられる建物が8戸あり、東部に遠くクスリ（釧路）を望む。

なお、元旦の上司である渋江長伯は、このときの旅行の内容を『東游奇勝』として著わしており、挿絵を交えて十勝海岸部の状況を詳しく紹介している。

12. 十勝川本流図

寛政12年（1800）ころ、八王子千人同心頭原半左衛門の配下とみられる皆川周太夫が作成した地図。寛政11年にシラヌカに入地した屯田農兵団八王子千人同心頭原半左衛門は、幕府に対し蝦夷地の内陸交通ルート調査の願書を提出。これを受けて翌寛政12年に蝦夷地御用掛の松平忠明は、ユウフツに入地している原半左衛門の弟の原新介に実地踏査を命じ、配下の皆川周太夫が踏査をすることになったとされる。皆川らはこの年の9月13日にヲホツナイ（大津）に入り、十勝川を上流に向か

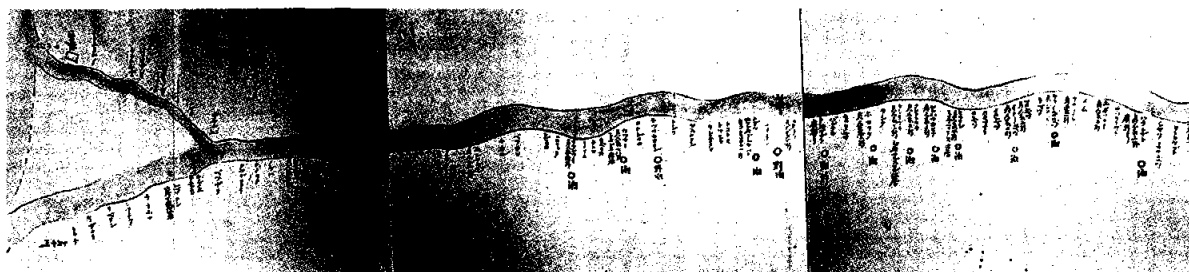


図12. 十勝川本流図（部分図）

って探査し、ニトマップ（清水町字人舞）から日高山脈を越えて沙流川筋に出て11月21日にアプタ（虻田）に達している。皆川は同年12月に松平忠明に復命書を提出、阿武田（虻田）から戸勝（十勝）までの道路開削計画書を添えている。このとき作成されたのが『十勝川本流図』である。函館図書館所蔵で、『松平忠明蝦夷踏査開拓見積図集』の中の1枚である。十勝川河口は二つに分かれ、91の地名と皆川自身が探査中どこに宿泊したかが記されている。このうち人家があるコタンは28で、これらのコタンの人家を合計すると92戸となる。文化5年（1808）の『東蝦夷地各場所様子大概書』では40コタン254戸とあるので、図に記されていないコタンがあるのかもしれない。

日高支庁と十勝支庁の境界にある国道274号線の日勝峠は、皆川が踏査したあたりを通過しているといわれている（千葉1964）。また、現在の帯広の地名「ハラトプト」が載る最も古い地図ともいわれている。

なお、皆川は八王子千人同心のメンバーには見られず、その出自も不明で謎の人物とされている。

13. 十勝川流域絵図

寛政12年（1800）～享和4年（1804）幕臣で北方探検家として知られる近藤重蔵の手による絵図。東京大学史料編纂所所蔵。近藤重蔵が蝦夷地調査を開始したのが寛政10年、以後文化4年（1807）までに6回にわたり調査を行った。『十勝川流域絵図』はこの間に作られたもので、のちにまとめられた『近藤重蔵蝦夷地関係史料』にも収められており、十勝関係の絵図として資料的価値が高い。縦82.9cm、横155.2cmの1枚もの。戸勝（十勝）川の河口は東の本流戸勝川と西の於発内川の二つに分

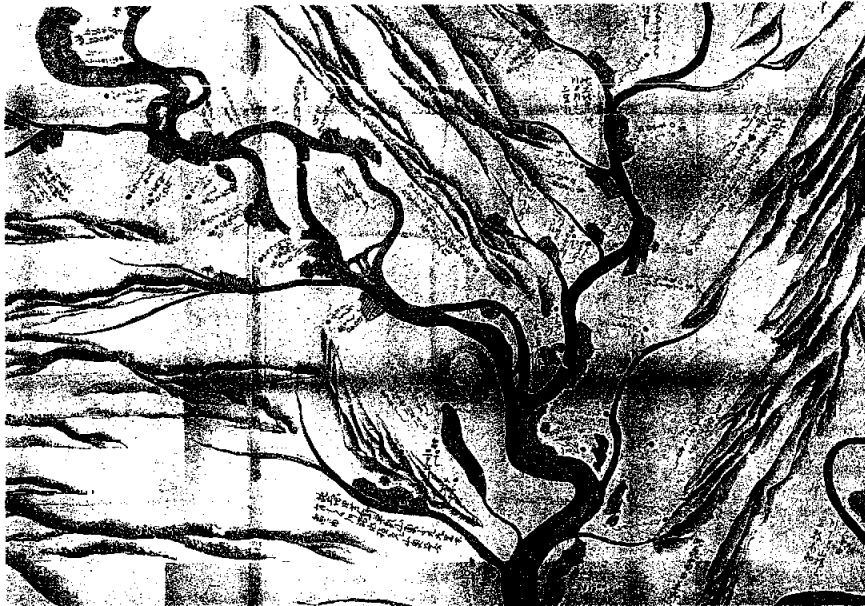


図13 十勝川流域絵図（部分図）

かれて描かれ、本支流域に散在するアイヌコタン名、人家、畠（畑）の坪数を記す。書き込まれた文字は近藤重蔵自筆といわれている。寛政12年の皆川周太夫の『十勝川本流図』のコタン名と一致するものもあり、同図を参考にしたことも考えられる。

記入された57コタンの中の54コタンに120戸以上の家が書き込まれている。ただ、コタン数が皆川周太夫の『十勝川本流図』の28、『東蝦夷地各場所様子大概書』の40に比べて多くなっており、どのような事情なのか不明である。和人がつけた行政区画上の村とコタンの違いなのかもしれない。

なお、絵図のいたるところに「畠二由（良し）」との書き込みがあり、近藤重蔵が十勝川流域の農耕に興味を持っていたことを裏付けるものである。畠を有するコタンは42あり、1戸当たりの畠の面積は68坪（羽田野1981）で、当時のアイヌの農耕を知る資料ともなっている。

14. 蝦夷地絵図

享和2年（1802）～文化4年（1807）近藤重蔵が作成した絵図。4種類が確認され、三井文庫、東京大学史料編纂所、国立国会図書館に所蔵されている。北海道本島を描いた彩色図で、島形は今日の北海道図とさほど変わらない。一枚物で絵図右下に長文の解説を付す。東京大学史料編纂所所蔵図の解説文に記されている寛政9年（1797）の年記から同年の作図とされていたが、高木崇世芝によれば、「享和2年以後、文化4年以前の作製と考えるのが妥当である」としている（高木2000）。本図には沿岸地名、河川名、山岳地名が記されているほか、解説文では将来の蝦夷地の中心地を現在の旭川付近としている。



図14 蝦夷地絵図

十勝の関係では、川名の「トカチ」、「トウフト」、「ヘロハツナイ」、「トヨイ」、「ラツロ」、「ヒロウ」がみえる。また、十勝川河口付近に「追加（余白記 トカチ川幅凡六十間余川上二十四里通航スヘン海面落口浅シ漸百石積以下ノ船入ベシ此川筋三中蝦夷松良材アリ」と書き込みがあり、十勝川の河口から上流へ約96 kmまで船で通行ができること、100石積み以下の船が通航すべきこと、川筋にエゾマツの良材があることなどを記述していて興味深い。

15. 仮称間宮林蔵蝦夷図

北海道大学附属図書館、国立公文書館内閣文庫での所蔵が知られている。輪郭は『大日本沿海輿地全図』の蝦夷地の図に似る。北大のものは『北海道全図（河川図）』の名称が付され、幕末期とされているが、丸瀬布町の秋葉實氏の考察によると、文化14年（1817）間宮林蔵の作図としている（秋

葉 2003）。内陸河川のアイヌ語地名が詳細であり、松浦武四郎には及ばないまでもそれに次ぐ詳しさとなっており、当時どのようにして調べたのか興味深い。北大附属図書館のものは現在表装されているが、表装前に帯広大谷高校に勤務していた故田沼穰氏が3年をかけて模写図を作成している。十勝の関係では、十勝川、利別川、札内川などの各河川が描かれ、そこにびっしりと枝川の川名が記されている。帯広では「ヲベレベレフベ」、「ウツベツ」、「フシコヲヘレヘレ」が見える。



図 15 仮称間宮林蔵蝦夷図（部分図）

16. 大日本沿海輿地全図

文政4年（1821）に測量家の伊能忠敬、孫の忠晦門弟らの協力により作成した実測にもとづく日本全図。全国を三枚で描いた小図、八枚で描いた中図、214枚で描いた大図の3種類がある。忠敬による蝦夷地測量は太平洋岸しか行われておらず、ほかの部分は間宮林蔵が測量し、それを基に地図が作成されたという考え方が一般的であるが、近年は西蝦夷地の再測量が行われたという研究もある。この地図によって、ほぼ現在の北海道に近い蝦夷地の形が世に知れることとなった。

伊能忠敬の『測量日記』によれば、寛政12年（1800）5月19日に蝦夷地の吉岡（福島町）に上陸し、日高のサルルを経由して7月8日にピロウ（広尾）に入り、ピロウで6泊。7月14、15日とトーブイ（当縁）に泊り、16日にはヲコツナイ（大津）に入り、18日にシヤクベツ（尺別）に出ている。根室のニシベツ（別海町）まで行って折り返し、8



図 16 大日本沿海輿地全図（部分図）

月18日ヲコツナイ, 19日にトーブイ, 20日にピロウに入り, 21日にサルルに抜けている。地名は海岸部にのみ記している。十勝川は内陸部が描かれていないので, ヲコツナイ川とトカチ川はつながっておらず, 別々の川として表わされている。中図(図16)には十勝関係分として海岸部に33の地名を記しており, 参考のために西から東に向かって順番に掲げておく。

ホンヒタ子シケ, タン子イシヨ, ヲシラルンヘ川, ビホロ川, フンヘヲマモイ, ヒロー川, ピロー, ラツコ川, ノツカ川, シマウシ, トヨイ川, モンヘツ川, ヘルツフ子一川, ホンアイプヌマ, トーブイ, トーフイ川, ヲン子ナイ, ヲイカマイトー, コハイ, ユート川, ユート一, ベシチシ子一, チフラブシトー, チョフシ川, チョーフシトー, ヲコツナイ, ヲコツナイ川, トカチ川, コンフカルシ岬, モヲコツペ川, ヲコツヘ岬, アコナイ川, モヲトンヘツ。

このうち、「ピロー」, 「トーブイ」, 「ヲコツナイ」の3ヵ所に赤マルを付して, 宿泊施設があることを示している。

17. 東西蝦夷地大河之図

天保3年(1832)から同5年にかけて松前藩士今井八九郎が作成した河川図集。東京国立博物館所蔵。3箇年にわたる測量に基づき, 北海道の30河川を十九丁の冊子にまとめたもの。縦24cm, 横17cm。地名と里程の記載のほか, アイヌの居住状況についても記している(谷沢, 佐々木1979)。十勝の関係では, ヲホツナイ川(十勝川)と記載された図がある。ヲサウシからイナウシまでが1葉, サツテクヲトフケからシントグまでが1葉の計2葉からなっている。河口部が二つに分かれ, 利別川が実際よりも圧縮されて短く描かれている。

今井八九郎の『測量圖取年記』によれば測量は, 文政11年(1828)に行われている(谷沢, 佐々木 前掲)。『東西蝦夷地大河之図』には下流からヲサウシ, ウラホロ, カンカン, ベチャロ, オン子ヲタ, セヨイ, ウシユシヘツ, ノヤウシ, トビウカ, テレケフ, トブチ, トシヘツブト, シャモナイ, タン子ト, ベチボ, ヲロベ, ヲシヲフ, ホンヘツ, ヒリヘツ, アショロ, ヲビホエ, リクンヘツ, メアカン(山名), チヲタ, フシコトカチ, ヤムワツカピラ, シャリヘツ, エカンヘツ, マカンヘツ, イナウシ, サツテクヲトフケ, サチナイ, ヲトフケ, シャリヘツ, ラエヘツ, ビバエロ, メモロ, ケカヘニ, サ子ニコロ, サヲロ, ビバウシ, ニトマフ, シントグの43の地名を記す。アイヌの家屋は小さいマル印を付してあり, 70戸が確認できる。ただ, 帯広を表わす「ヲベレベレフベ」(『仮称間宮林蔵蝦夷図』の表記による)が記されていない。

今井は松前藩士で測量家。間宮林蔵に師事し, 文政11年から蝦夷地全域の測量に従事する。最初に測量したのは, 十勝を起点として襟裳岬に至る海岸部とされる。以後連年測量に従事し, 天保12年には『蝦夷地全図』を完成させている。作成した地図は, ほかに『北海道測量縮図・ゴリン澤図』, 『奥尻島測量原図』など多岐にわたる。

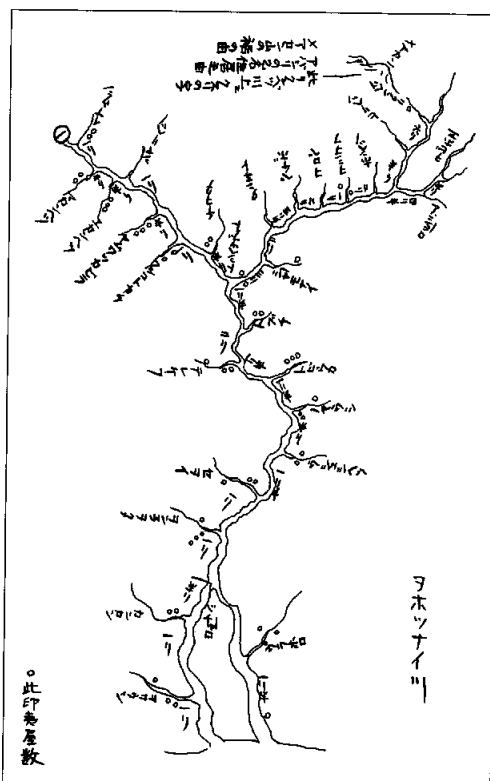


図17 東西蝦夷地大河之図

18. 蝦夷地里数書入地図

天保2年(1831)に松前藩士今井八九郎が作成した蝦夷地沿岸図。早稲田大学図書館所蔵。色彩が美しく、各地間の里数を詳しく記す。『東西蝦夷地大河之図』より前期の作と思われる。『東西蝦夷地大河之図』では、十勝川を「ヲホツナイ川」としているが、この地図では「トカチ川」と記す。

河口は二つに分かれており、西がヲホツナイ川、東がトカチ川。河川左岸に15、右岸に17、合計32の地名を記す。アイヌの人たちの家は赤印で示している。『東西蝦夷地大河之図』では、全体で43の地名を記載し、このうち利別川筋には12の地名を記しているが、この地図では全体で32、利別川筋には「トシヘツフト」の1カ所を記すのみである。したがって、利別川筋を除くと両図の地名数は31となり同数である。また、この地図で左岸にあった「セヲイ」、「イカンヘツ」、「ヒハイロ」、「サヲロ」が、『東西蝦夷地大河之図』では右岸に移動し、逆に右岸にあった「ノヤウス」、「トフチ」が左岸に移動している。当時、アイヌの人たちの交通手段は丸木舟であり、河川を丸木舟で自由に行き来していた。この地図には朱書きで「トカチヨリシントク追川舟路凡三十三里」との書き込みがあり、アイヌの人たちは丸木舟でシントク(新得)まで行っていたことが読み取れる。

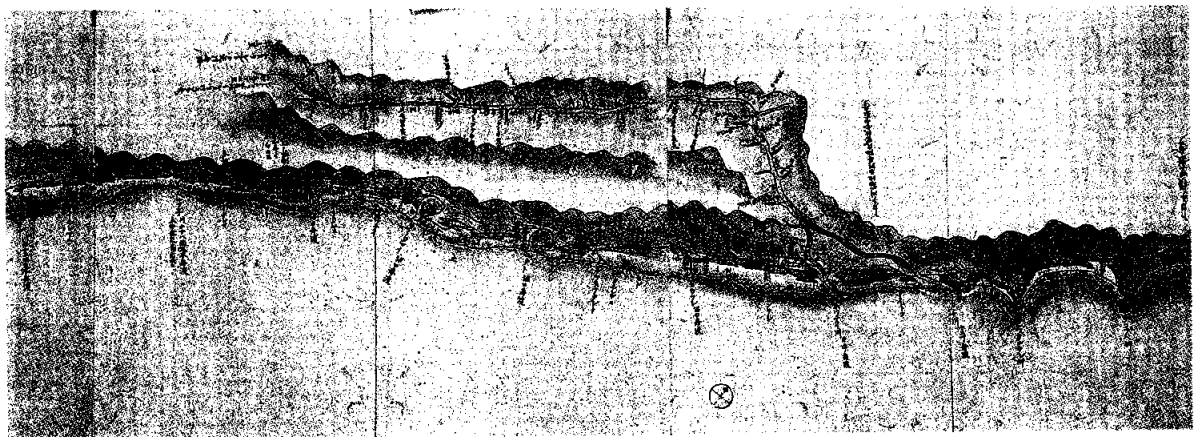


図18 蝦夷地里数書入地図(部分図)

19. 蝦夷^{こう}闊境輿地全図

嘉永6年(1853)に藤田惇斎が発行した北方図。絵師は『横浜浮世絵』などを描いたことで有名な橋本玉蘭斎(別名五曇亭貞秀)。木版で縦125cm、横100.5cmの大型図。蘆田文庫のものは縦112.4cm、横88.5cmとある。嘉永7年に江戸の書物問屋の播磨屋勝五郎の店からも出版された。北にカラフト島、東に千島列島を描き、蝦夷地は上下に押しつぶしたような扁平な形をしている。色彩が美しく、海岸部の地名が詳細。航路も詳しく描かれ、当時広く普及していたといわれている。右下に16のアイヌ語の単語を記載している。きれいな図ではあるが、内容は古い情報をもとに作られている。

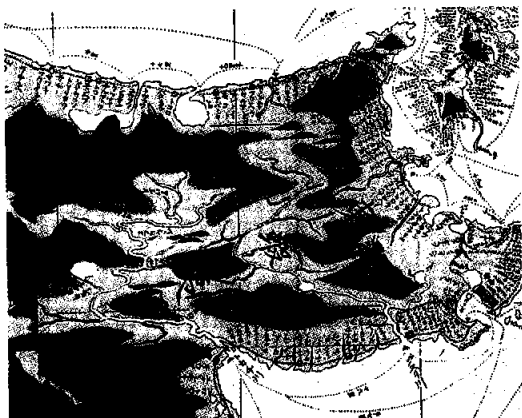


図19 蝦夷闊境輿地全図(部分図)

海岸部の十勝の地名は西から「ヒタ、ヌン」、「ヲシ

ラヘツ」, 「ペンベマナイ」, 「ヒロウ」, 「ラツコヘツ」, 「ムツカヘ」, 「トヨイヘツ」, 「ヘロツナイ」, 「フイツシャ」, 「トウフイ」, 「ユウトウ」, 「ユクシエトウ」, 「チウ〇〇」, 「ヨホツナイ」, 「トカチ川」, 「トカチ」, 「ヨコツヘ」, 「ヨリヨリヘツ」, 「アツナイ」, 「ユウア〇イ」, 「ヲトヘ」, 「チクヘツ」の22の記載がある。内陸部は「ウニホロ」, 「シフンライ」, 「シカリ」, 「シヤリ」, 「サツホロ」, 「コツカラハシ」, 「サツナイ」, 「アハシリ」の8地名が見える。

20. 東西蝦夷山川地理取調図

安政6年(1859)ころに幕末の探検家で後に開拓使判官となった松浦武四郎が描いた蝦夷地図。地図は26舗あり、これに凡例、案内アイヌの人たちの名前、地名、境界、持場、里数、人別などを記した解説書2舗を加えて28舗からなる。経緯度各1度を以って1枚とし、1枚の大きさは縦54.5cm、横42.4cm。十勝は、『七 緯四十二度 経八度 從東部シヤマニ領ホロマベツ ホロイツミ ピロウトカチ川 到クスリ領ハシクロ』と『十一 緯四十三度 経七度 石狩山中 併到トカチ山中 サヲロ水源』, 『十二 緯四十三度 経八度 從東部トカチ山中 併石狩 テシホ トコロ サルマ水源 クスリ領 アカン湖』の3枚に記されている。3色刷りで、輪郭は伊能忠敬の中図を基にしているといわれる。地名は内陸部まで詳細に記されており、『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』, 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』などと合わせて北海道史や地名研究者にとって貴重な資料となっている。

なお、26輯の地図に白紙24枚を貼り合わせた大型図が北海道立文書館、北海道大学附属図書館などに所蔵。また、北海道開拓記念館には、貼り合わせた大型図に付箋などを貼り北海道の国、郡を定めるための検討に用いたとされる仮称『松浦武四郎北海道国郡検討図』が株式会社北海道ホテル(帯広市)から寄託されている。そこには、松浦武四郎が十勝国名の選定にあたって「十勝」のほかに「刀勝」, 「利乳」, 「尖乳」の3案を持っていたこと、郡名の「大津」が「十勝」に、「下川」が「中川」に、「十勝」が「上川」に変更されたこと、鹿児島藩の支配地が3郡(当縁、広尾、様似)から5郡(当縁、広尾、様似、河西、浦河)に変更されたこと、静岡藩の支配地が5郡(足寄、十勝、河東、下川、上川)から4郡(十勝、河東、下川、上川)に変更されたことなどが読み取れるとされている(三浦、笹木2003)。

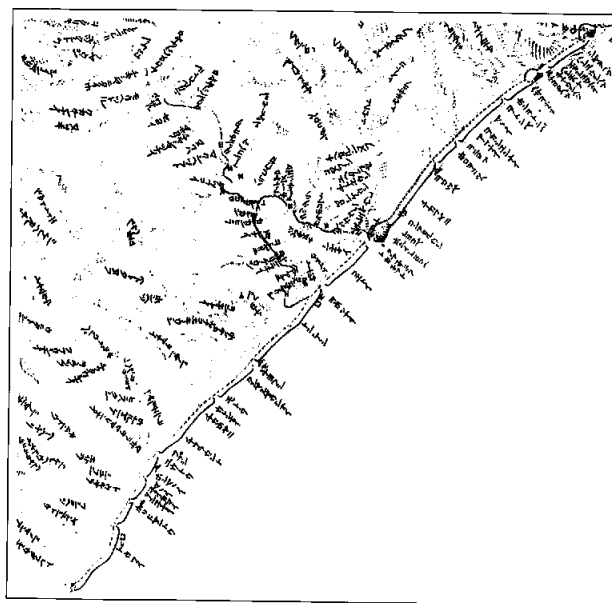


図20 東西蝦夷山川地理取調図七(十勝海岸部分図)

21. 十勝州之内静岡藩支配地四郡地図

旧幕府軍の仙台藩が十勝を去ったあと、明治2年(1869)から十勝国の十勝郡、中川郡、河東郡、上川郡の4郡を分領支配していた静岡藩が、同4年に支配地の4郡を記した地図。北海道大学附属図書館所蔵。同じ地図が北海道立文書館蔵書の『静岡県開拓入植記録』の中にもあり、そこには『十勝川流域図』と書かれている。



21 十勝州之内静岡藩支配地四郡地図

江戸幕府の大政奉還により1地方藩となった徳川家は、田安亀之助（徳川家達）を宗家相続者として慶応4年に駿府藩（明治2年静岡藩に改称）となり、明治2年～同4年に十勝4郡の分領支配を命じられた。静岡藩は「十勝国開業方」という行政組織を設け、開業方頭に堀小四郎を任命して4郡支配あたったとされる（君1971）。このとき、残り広尾郡、当縁郡、河西郡の3郡と日高国の様似郡、浦河郡は鹿児島藩が支配を命じられたが、支配の返上でこれら十勝の3郡は徳川御三家の一橋家、田安家が受け持ち分領支配を行った。

四郡地図は縦94cm、横129cmの手書き。経緯線、郡界、河川、山岳、原野、平野、道路、アイヌの人たちの所在などを記す。符号（凡例）には「図解説略1本」、「十勝略志説1本」、「地名箋1本」を別に附すとある。作者ははっきりしていないが、白野夏曇ではないかと推定されている。白野は当時十勝国開業方の御用取扱という職にあり、堀が静岡に在勤している中で実質十勝の責任者という立場にあった。このため、この地図を作成できるのは白野夏曇以外は見あたらないとされている。

静岡藩は明治4年の廃藩置県で静岡県となり、分領支配も翌5年に終止符を打った。十勝における分領支配はわずか2年足らずで終わりを告げたことになるが、この支配において特に目立った成果は上がらなかったといわれている。

22. 十勝国河西郡区画図

明治5年ころ開拓使が作成した河西郡の区画図。縦55cm、横40cm。凡例には「十勝国第五大区河西郡小区全郡」とある。測量士で画工でもあった一瀬長春が開拓使の命を受けて作成したと推定されている。北海道大学附属図書館所蔵。下部を右から左へ流れる十勝川を境に河東郡、右を上川郡、左を中川郡、上部を日高国に接する。河川を中心とした図で、左から右へ佐津内川（札内川）、帯広太（帯広川）、フシコビパイロ川・ビパイロ川（美生川）、目室川（芽室川）、ホ子ヲブ川（小林川）が並び、いずれも上部日高山脈から発し十勝川に注いでいる。帯広太の上流には「ポンヲヘ、ロフ（ポンオベレベレケブ川）」と「ウツベチ（ウツベツ川）」が見える。現在の帯広市域にはハラトウ村、下帯広村、上帯広村、フシコ村、フシココタンが記されている。



図22 十勝国河西郡区画図

ほかに、当時作成された同類の地図に『十勝国広尾郡区画図』、『十勝国上川郡区画図』、『十勝国河東郡区画図』、『十勝国中川郡区画図』、『十勝国十勝郡区画図』、『十勝国当縁郡区画図』がある。このうち、『十勝国中川郡区画図』は、明治5年に一瀬が書いた『北海道河源探討記』の附図となっている。一瀬は十勝とかかわりが深く、静岡藩十勝開業方御用取扱の白野夏曇が十勝の状況を調査して作成した『十勝支配地跋涉図』は、一瀬の作

といわれている。また、『日高、十勝、石狩三州標木建設跋涉図』には標木を立てた十勝の地名などが記されている。

23. 北海道十勝州大津内十勝川並支流佐幌嶽ヨリ石狩州空知川上迄図

明治7年開拓使が作成した地図。北海道大学附属図書館所蔵。「北海道行図書之印」の朱印が押されており、北海道史編纂が終了したことにより、他の編纂史料と一緒に北海道大学附属図書館の蔵書となったもの。地図はNo.1からNo.4までの4枚からなり、縮尺は3万分の1。河川、漁場、漁小屋、番屋、蔵、アイヌの人たちの家、泥炭地などのほか、下流域には漁場として、「マクンベツ」、「タ子ヤウシ」、「ヘトアシシ」、「ウサウシ」、「バツチャロ」などを記す。河川の回りには樹木とみられる絵が描かれている。凡例には石橋俊勝地質検査、加藤義乗実測模図とあり、仮説ではあるが開拓使の地誌提要の編纂に伴って作成されたものかもしれない。加藤義乗は明治6年に開拓使からライマンの地質調査の同行を命じられたことでも知られている。また、開拓使の石橋義乗は明治6年に物産取調べなどを行っている。

地図No.1は縦105cm、横75cm。十勝川並びに大津川の河口からチプカルウシまでを記す。下部に大津漁場付近の拡大図（縮尺5000分の1）を配す。No.2は縦105cm、横75cm。十勝川と利別川の合流点下部から十勝川のイカンベツ付近及び利別川上流のケナシバまでを記す。No.3は縦74.8cm、横105cm。十勝川本流のアシリベツから上流のシヘヲチまでを記す。No.4は縦104.8cm、横75cm。佐幌川のサン子コロから上流のシントコ及び佐幌岳までを記す。帯広は「ヨビロビロ」、音更は「ヲトプケ」、幕別は「マカンベツ」、「マカンベツ」と見える。

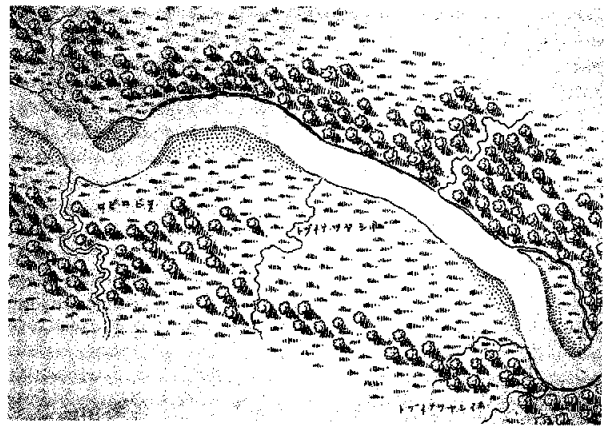


図23 北海道十勝州大津内十勝川並支流佐幌嶽ヨリ石狩州空知川上迄図（部分図）

24. 北海道実測図

明治8年（1875）12月、三角測量事業の成果としてモルレ・S・デーが作成、開拓使が発行した50万分の1の図。測量の終了した沿岸部と道南など1部地域は詳細であるが、内陸の大部分は空白のままとなっている。開拓使の三角測量は明治6年にアメリカ人のジェームス・R・ワッソンの指導により始められ、同7年に同じアメリカ人のモルレ・S・デーがその後を引き継いで進められた。十勝は同7年から8年にかけて松本安宅らにより沿岸部の測量が行われている。その後、明治9年には大津川および利別川など大小20河川を測量（高倉1963）、これらの成果や同12年の係員の調査を基に同14年に新しい『北海道実測図』が参謀本部から発行された。明治7年デーが勇払原野に引いた勇払基線は、三角測量による北海道地図の最初の一筆とされている。

25. 北海道殖民地撰定報文付図「十勝原野殖民地撰定概図」

明治24年（1891）に北海道庁が発行した『北海道殖民地撰定報文』に添えられた北海道内各原野

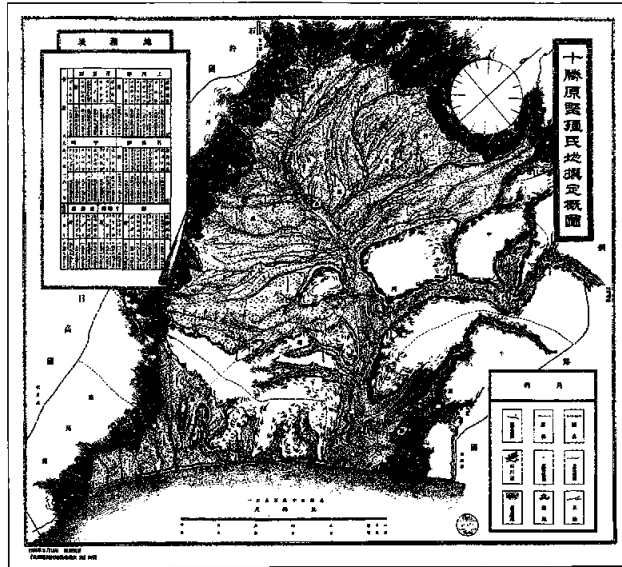


図 24 北海道殖民地撰定報文付図「十勝原野殖民地撰定概図」

の殖民地撰定地図。全部で10枚あり、十勝（足寄郡を除く）は『十勝原野殖民地撰定概図』として収められている。縮尺25万分の1で、国界、郡界、原野位置、既定道路、見込道路、農業適地、湿地などが記載されている。ここでいう「殖民地」とは、道庁が開拓を行おうとした予定地を指す。道庁は開拓の促進を図るため、それまで入植希望者にまかせていた殖民地撰定を自らが行うこととし、明治19年に原野の調査に着手した。同22年に主な原野の調査を終了、耕作牧畜などに適する土地約96万町歩を選定、その結果を明治24年に『北海道殖民地撰定報文』として公刊した。十勝は道庁技師の内田瀨、柳本通義らの努力によって調査が進められ、ヲビル

ビルupp（帯広）など43原野、29万7,624町歩が選定された。このうち直ちに開墾できる地が5万8,935町歩、排水後に耕作に適する地3万3,623町歩、牧場適地19万8,534町歩、大改良を要する地6,034町歩とされた。郡と原野の関係がはっきりしていないためか、「ムムロプト」、「ムムロ」が上川郡、「上シホロ」、「下シホロ」が中川郡に記載されるなどの誤りがみられる。

26. 十勝国殖民地地区画図

明治26年（1893）北海道庁が発行した2万5000分の1の原野区画図。帯広、伏古別、音更、然別各原野を記す。殖民地地区画とは、北海道の未墾地開拓にあたって、入植希望者へ土地の配分を行うために測設された土地地区画で、十勝国は明治25年南北に走る石狩通（現国道38号）を基線とし、上帯広村南部を東西に引いた一号線（現大通・国道236号）との交点を基点とし、南北に「線」を、それと直行するように東西に「号線」を300間ごとに引いた。それによってできた正方形の区画を6等分して面積5町歩（間口100間×奥行き150間）の小区画にし、それを農家1戸あたりの標準的な面積とした。開拓者が現地に行かなくても現況がわかるよう地形（丘陵、川、湿地）、植生（草木）、道路、耕地などを明示したほか、将来村が形成されることを予想して官公衝、学校、寺院を設けるための公共用地、墓地、風防林地、市街予定地を設定した。これによって、将来生まれようとする北海道農村の基本的な形態が定まったともいわれる（高倉編1987）。この図では、帯広にはまだ市街地が設けられておらず、明治26年になって1号線に沿って今の大通が設けられ、市街地が区画されていった。

なお、殖民地地区画図は原野ごとに作られており、さらに増区画図なども作られたので、作成総枚数は十勝管内だけでもかなりの数にのぼる。

27. 北海道仮製5万分の1図

明治29年（1896）から陸軍省陸地測量部により順次作成された縮尺5万分の1の地形図。等高線は20mごとに描かれ、今日の国土院発行の5万分の1地形図につながる地図である。初期のも

のは刊行されず、同31年作成のものから逐次刊行された。しかし当時のものは、各地の位置、高低などが正確でないため、明治43年から部分修正を行い、大正4年からより正確な測量図が刊行されていく。十勝に関する46枚は、ほとんどが明治29年に作成され、残りの地図（仮製版）も大正13年（1924）までにはすべての作成が終わった。このうち刊行されたのは、大正年間に作成された8枚である。作成された地図の図名を年次ごとに掲げておく。なお、現在の5万分の1地形図と名称が異なるものについては、現在の名称をカッコ書きで記した。

明治29年 ウコタキヌプリ山、ユケランヌプリ（上茶路）、尺別（音別）、オウコッペ（厚内）、足寄（足寄太）、本別、アプナイ山（常室）、大津（浦幌）、モイワ山（上士幌）、蓋派（高島）、止若（十勝池田）、ノヤウシ（糠内）、然別沼（然別湖）、シペオチ（中士幌）、帯広、トッタベツ下流（大正）、湧洞（湧洞沼）、オイカマナイ沼（忠類）、歴舟（大樹）、廣尾、猿留（庶野）、歴舟川中流（上札内）、トヨイベツ上流（上豊似）、廣尾嶽（榮古岳）、十勝川上流、十勝岳、佐幌岳、クッタラウシ（新得）、ケネ（御影）、札内岳、ニシタプ上流（西達布）、トマムシヤウンヌプリ（落合）、沙流川上流（千栄）、トッタベツ岳（幌尻岳）、札内川上流、神威岳。

明治30年 ハシチヤシ（小利別）。

明治31年 トムラウシ（旭岳）。

大正9年 上足寄、湊別、芽登温泉、ニペソツ山（糠平）。

大正10年 阿寒湖。

大正13年 鬮木禽（本岐）、土居常呂（常元）、石狩岳。

28. 北海道十勝国全図

明治32年（1899）に河西支庁（十勝支庁）が発行した縮尺10万分の1の地図。北海道庁事業手・鳥居欣四郎輯製。印刷者は東京市の高田己三。印刷所は同じく東京市の株式会社秀英舎。縦187.7cm、横118cmの大型図。縦47cm、横59cmの紙8枚を貼り合わせて1枚物にしたもの。発行年によって多少寸法が違い、当時釧路国であった足寄郡陸別町および足寄町を欠く。等高線は黒色で引かれているが、翌明治33年に十勝国大津村（豊頃町）の内藤始（発行所 十勝内藤如望閣）によって発行された版では、茶色で描かれている。郡界、町村名、殖民区画、道路、鉄道、鉄道予定線などが書き込まれ、河川名も詳細。明治34年版の井上壽所有図は、同35年当時の国有未開地処分法に基づき土地貸付をうけた農家所在の書き込みがある。同系の図は何年まで発行されたかは不明であるが、最新では明治41年に帯広町の高橋至誠堂から発行されたものが確認できる。明治34年版のものは北海道大学附属図書館、北海道立図書館、札幌市中央図書館、函館市中央図書館、帯広市図書館などに所蔵されている。

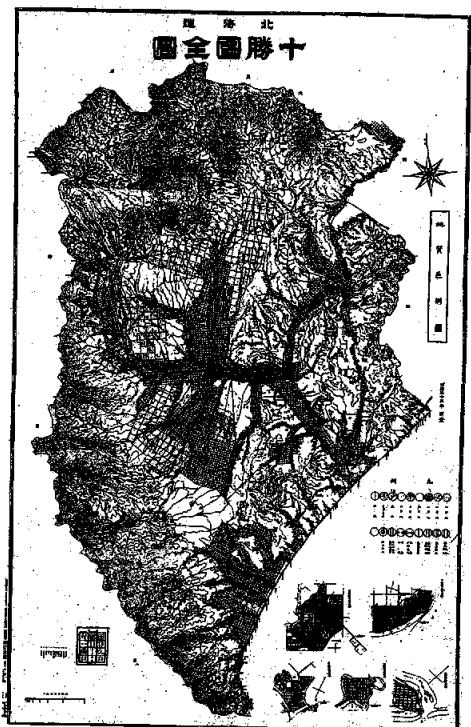


図25 北海道十勝国全図

29. 十勝国全図

大正4年(1915)に帯広町の日野間測勝館が発行。縮尺10万分の1。縦176cm、横107cmの大判地図。印刷所は札幌区(札幌市)の北海石版所。売価は2円で、帯広町の十勝信託合資会社が売り捌きをしている。郡界、町村名、殖民区画などを記す。明治32年に発行された『北海道十勝国全図』と同系統の地図と思われるが、管見のかぎり十勝における10万分の1の大型図は、この大正4年の発行をもって見られなくなる。士幌町総合研修センター(實相寺寄贈図)、帯広市図書館などでの所蔵が知られている。

なお、『十勝国全図』と冠した地図は多数あり、寸法は小さくなるが大正2年十勝教育会発行図(20万分の1)、同12年河西支庁発行図(20万分の1)、同年星測量館発行図(20万分の1)などが知られている。

大正2年の『十勝国全図』は殖民区画の記載がなく、道路が赤線で表示されている。鉄道は根室本線、網走線はあるが、士幌線、広尾線の記載はない。駅名は帯広を除きすべてカタカナ表記されるなど、全体として古い情報で作成された地図となっている。また、地図上に記載されている「大正2年」の文字はマジックで記されており、年代は推定なのかもしれない。

大正12年に発行された2種類の『十勝国全図』は内容が類似しており、発行所は違うが同系統の地図と思われ、国界、郡界、村界、鉄道、駅通、殖民区画などのほか彩色が施されてきれいな仕上がりになっている。

30. 十勝詳図

昭和8年(1933)に帯広市所在の十勝地図刊行会が発行した20万分の1図。縦100.5cm、横72.5cm。製図者は帯広市の小野光春、発行人は帯広市の高橋文雄。大正12年発行の『十勝国全図』(20万分の1)の後継地図と思われる。郡界、市町村名、殖民区画などが記されており、昭和13年に第2刷が発行されている。

なお、昭和24年、同36年に帯広市の北日本新聞社から発行された『新版十勝管内詳図』(20万分の1)は、『十勝詳図』の後継地図とみられる。発行人は加森藤市。殖民区画、国界、郡界、町村界、河川、道路などが記される。戦後間もない発行のためか紙質が悪く、内容も『十勝詳図』に比べて簡略化されている。

おわりに

地図から読み取れる情報をもとに、古い時代の十勝の様子を調べることを目指したが、十分なものはならなかった。課題が大きすぎたのかもしれない。他の古い文献との照合にもっと時間を費やすべきであった。しかし、地図の紹介も兼ねて帯広・十勝が地図上にどのように現れてきたのか、その一端は明らかにすることができたと思う。古い地図は高価なものであり、一部を除き筆者は所蔵していないため、北海道大学附属図書館、北海道立図書館、北海道立文書館に出向いての所蔵図の閲覧、古地図展での見学、複製図、古地図集などを集め参考にさせていただいた。今後、さらに内容を深める必要があろうかと思う。

なお、この文章は平成16年に川田工業創立45周年記念事業として出版された「滯標」に「古地図に見る十勝川」として書かせていただいたものに一部訂正があり、また、本来載せるべき地図を載せて

いなかったで、このたび全面的に書き改めたものである。資料を精査し正確を期したつもりであるが、誤りがあるかもしれないので、その場合はご了承ください。

引用・参考文献

- 「正保日本総図」正保元年(1644)～慶安2年(1649)『青森県史 資料編 近世』1 所収 平成13年(2001) 青森県史友の会
- 松前景広編「新羅之記録」正保3年(1646)『新北海道史』第七巻史料一 所収 昭和44年(1969) 北海道皆川周太夫「十勝川本流図」寛政12年(1800)
- 近藤重蔵「十勝川流域絵図」寛政12年～享和4年(1804)『近藤重蔵蝦夷地関係史料・付図』所収 平成5年(1993) 東京大学史料編纂所
- 『元禄国絵図』元禄13年(1700)
- 『松前家臣支配所持名前』元禄元年(1700)
- 寺島良安『和漢三才図会』正徳3年(1713)
- 『松前西東在郷并蝦夷地所附』享保12年(1727)
- 『津軽一統志巻十』享保16年(1731)『新北海道史』第七巻史料一 所収 昭和44年(1969) 北海道
- 『蝦夷商賈聞書』元文4年(1739)頃
- 『松前年々記』寛保2年(1742)頃
- 林子平『三国通覧図説』天明5年(1785)『北方未公開古文書集成』第3巻 所収 昭和53年(1978) 叢文社
- 渋江長伯『東游奇勝』寛政11年(1799)
- 間宮林蔵『仮称間宮林蔵蝦夷図』文化14年(1817)頃 平成2年(1990) 田沼穰模写図
- 『松前旧事記』文政10年(1827) 明治37年(1904) 大沢照浮写
- 吉田東伍『増補大日本地名辞書』第八巻 明治42年(1909) 富山房
- 和泉無人閑編『蝦夷の燈』昭和4年(1929) 和泉盛
- 高倉新一郎、柴田定吉「我が国に於ける北海道本島地図の変遷(一)」『北方文化研究報告』第6輯 所収 昭和17年(1942) 北海道帝国大学
- 高倉新一郎、柴田定吉「我が国に於ける北海道本島地図の変遷(二)」『北方文化研究報告』第7輯 所収 昭和27年(1952) 北海道大学
- H・チーリス編『北方探検記』昭和37年(1962) 吉川弘文館
- 高倉新一郎「明治以後の北海道測量史」『北方文化研究報告』第18輯 所収 昭和38年(1963) 北海道大学
- 千葉小太郎『寛政日勝道路考』昭和39年(1964) 郷土資料展示運営委員会
- 君 尹彦「静岡藩の十勝支配」『新しい道史』第9巻第5号 所収 昭和46年(1971) 北海道
- 梅木通徳『蝦夷古地図物語』昭和49年(1974) 北海道新聞社
- 織田武雄『地図の歴史 日本篇』昭和49年(1974) 講談社
- 黒田日出男「江戸幕府国絵図・郷帳管見(一)」『歴史地理』第九十三巻第二号 所収 昭和52年(1977) 日本歴史地理学会
- 谷沢尚一、佐々木利和「今井八九郎の事績-東西蝦夷地大河之図を中心に-」『北海道の文化』41 所収 昭和54年(1979) 北海道文化財保護協会
- 羽田野正隆「十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷」『北方文化研究』第14号 昭和56年(1981) 北海道大学文学部
- 大石慎三郎「田沼意次と蝦夷地探検(下)」『図書』第427号 所収 昭和60年(1985) 岩波書店
- 千葉小太郎、田沼 穰「十勝・帯広における集落の形成」昭和61年(1986) 十勝郷土研究会
- 高倉新一郎編『北海道古地図集成』昭和62年(1987) 北海道出版企画センター
- 佐々木利和編、山田秀三監修『アイヌ語地名資料集成』昭和63年(1988) 草風館
- 成田修一編『蝦夷地図抄』平成元年(1989) 沙羅書房
- 川村博忠『国絵図』平成2年(1990) 吉川弘文館
- 旭川市史編集会議編『新旭川市史』第六巻史料1 平成5年(1993) 旭川市
- 十勝大百科刊行会『十勝大百科事典』平成5年(1993) 北海道新聞社
- 菊池勇夫『アイヌ民族と日本人』平成6年(1994) 朝日新聞社
- 高木崇世芝「正保日本総図の北方図地名」『アイヌ語地名の研究』第1号 所収 平成10年(1998) 北海道出版企画センター
- 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』平成11年(1999) 北海道大学図書刊行会
- 高木崇世芝「近藤重蔵の蝦夷地図と道央開拓計画」『北の青嵐』第90号 所収 平成12年(2000) 北の青嵐
- 後藤秀彦「近世文書に見るトカチ・ヒロウ・ヲホツナイ」『浦幌町立博物館紀要』第2号 所収 平成14年(2002) 浦幌町立博物館
- 三浦泰之、笹木義友「松浦武四郎「北海道国郡検討図」について」『北海道開拓記念館研究紀要』第31号 所収 平成15年(2003) 北海道開拓記念館
- 秋葉 實「仮称 蝦夷河川図についての一考察」『北の青嵐』第126号 所収 平成15年(2003) 北の青嵐
- 高木崇世芝『北海道の古地図』平成15年(2003) 五稜郭タワー
- 高木崇世芝「江戸幕府の国絵図作成と松前藩」『平成16年9月25日文化財講演会配布資料』平成16年(2004)
- 十勝川川舟文化誌「漂標」編集委員会『漂標』平成16年(2004) 十勝川川舟文化誌刊行会
- 三好唯義、小野田一幸『図説 日本古地図コレクション』平成16年(2004) 河出書房新社
- 北溝保男「元禄・松前嶋郷帳」について『アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集』所収 平成18年(2006) 北地文化研究会
- 高木崇世芝『木版蝦夷地図にみる北海道』平成19年(2007) 北海道立図書館